



Title	逆接仮定表現の末流
Author(s)	山口, 堯二
Citation	語文. 1995, 64, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68878
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

逆接仮定表現の末流

山 口 堯 二 一

順接と逆接、仮定と確定の組合せで区別できる四種の条件表現の形式は、古代語において最も相互対応的であった。中世を境にその体系が崩れていったと概言できる条件表現の推移の中で、逆接仮定表現はどういう方向へ、どのように推移していったか。本稿はその点を古代語から現代語へと、時間の流れにそって辿ってみようとするものである。⁽¹⁾

古代語で逆接仮定の関係表示を担ったのは、接続助詞「とも」(終止形+とも)形式)であったが、その後の逆接仮定の形式は、特にその仮定性について、次第により文脈依存的なものを標準的とする方向に推移していき、仮定性の明示には、必要に応じて不定詞、その他の副詞、あるいは、推量辞などとの共起に依存する度を増していった、というのがその大筋になるだろう。

一 「とて」「とても」とその周辺

接続助詞「とも」(終止形+とも)形式)が標準的であった中古語においても、次のように「とて」の形によって、逆接仮定的な関係表示がより文脈依存的になされることはあった。

(1)桜花 ちらばらば ちらなむ ちらす^{とて} ふるさと人の きても見なくに

(古今・春上)

・しば／＼行きけれど、猶いとうしろめたく、さり^{とて}、行かではたえあるまじかりけり。(伊勢・四十二)

こういう「とて」は、「として」「といひて」などの意のより簡略な言い方として、たとえば次のように順接確定的にも用いうる形式であった。

(2)あづまの方に行きて住み所もとむ^{とて}、ともとする人ひとりふたりして行きけり。(伊勢・八)

・まつりごとよくしたまふ^{とて}、筑紫人さながらしたがひ申たりければ、(大鏡・道隆伝)

「とて」によって示される意味関係は、それだけ順接・逆接の区別に関して、より文脈依存的であったが、そのことが例(1)などの場合、逆接的な意味関係をも、かえってより自省的に表示できる所以だったようである。

逆接仮定の接続助詞「とも」と対比すれば、「とて」形式は順接・逆接に関してのみならず、確定・仮定の区別に関しても、より文脈依存的な形式であったと考えられる。その確定・仮定に関する文脈依存性は、仮定的にせよ確定的にせよ、「とて」形式の示す条件

關係がそれだけ一般条件的になるといふことであらう。

しかし、逆接仮定的な用法の「終止形十とて」(以下「とて」形式と呼ぶ)の例を多く見かけるようになるのは、中世鎌倉期ごろからである。中世以後の逆接仮定的な例には、たとえば次のようなものが拾える。ただし、その表現性は「現実假定」⁽³⁾的なそれに偏つてゐる。

(3) 永しとてたのむべきかは春の日の日かげにおふる身はよわりつ
つ(壬二集)

・ たかしててなにかはせんよ竹のひとよふたよのあだのふし
をば(古今著聞集・好色・なよ竹物語の事)

・ 「法花経ヨム者ハ、必ズ地獄ニ落ル也。浅間シキ罪障ナリ。雑
行ノ者ナリトテ、拙事ゾ」ト云ケルヲ信ジテ(梵舜本沙石集・

一)

・ いきはひありとて、たのむべからず。(徒然草・二百十一)

・ 史漢ノカワリメヲバ史記家ト漢書家トノチガイト思フベシ。チ
ガウタトテ、ドレヲモ不可譲ゾ(史記抄・項羽本紀・五七ウ)

・ 舟ガ水ニヨク行トテ、コレヲ陸ニ推サントセバ、一世ヲ終トモ、
七尺八尺トモ、ユクマジキ也。(荘子抄・天運篇・三十五ウ)

中世ごろからは、この「とて」形式と並んで、「終止形十とて」の形(以下「とて」形式と呼ぶ)も現れる。「とて」形式は、「とて十も」、「とて十も」のどちらにも解せるが、いずれにせよ「も」の頭在する「とて」形式は、「とて」形式のもつ逆接關係の表示性をより明示化することになり、それだけ古代語から「終止形十とて」形式が担ってきた古い規範に、その表現性を近づけ得た形と言えよう。「とて」形式の「とて」には、「つても」に転じた

例もあるので、次に併せて示す。

(4) 終日鷹仕ヒ行キ給ヒテ極ジ給ヒニケルニ、此ク進タレバ、「下
衆ノ許也トテモ、何ガハセム」トテ皆食リス。(今昔・二十二
・七)

・ 「ひととせ、仏の法とき給ひしに、此身はむなしき物ぞとのた
まひしかば、ありとて、ありとおもふべからず、なしとて、
母さはぎまどふべからず」とこそ申侍りけれ。(玉物集・六)

・ 撰津国住吉のわたりにいたり給て、齋料のつきにければ神主国
基が家におはして、……「……今夜ばかりはこゝにとまり給
へかし。……」といはせたりければ、世を捨てやどもさだめぬ
身にしあれば住吉とてとまるべきかは(古今著聞集・五・一
五一)

・ 夜々は、さやうの事もなく、こゝろすみ侍ればめぐるなり。め
ぐらずとて、生死無常のおもはれて、いねもせられず侍れば、
ありき侍るなり。(京大近衛本撰集抄・二)

・ ……此外ハ事相ノ大事也。命惜トテモ、不可云ト(梵舜本
沙石集・六)

・ 所詮山伏なりとて、五人三人こそあらめ、十六七人の人々に
いかでか関手を取らではあるべき。(義経記・七)

・ 契らぬとて名立つに、ひとりおよるか、ひとりおよるかの。
(隆達小歌集)

・ 大勢の中に一人二人たまたま賢なる者ありとて、かへつて難
しがり嫌がりて、狂人逸哲者と言ひなして、押込め埋もらかし
て用ひざる儘に、力無く詔ひ者になり行く。(仮・浮世物語・
二・十一)

・女郎を売るとも銀の代には、本の女房のごとくに、如何様にも其日はなりません。(仮・難波鉦・一六)

・其子の咄しだつても、何だか知れもしねへ。(人・春色梅児誉美・初・一)

近代語ではこういう「とて」形式や「とても」形式を、不定詞と共に起させる傾向もめだつてくる。その場合、不定詞との共起は、その条件の不定化によって関係の一般性を強調することになる点で、仮定性を明示化する働きをすと見てよい。次の例(5)は「とて」形式、例(6)は「とても」形式との共起例である。「とて」の「とて」に転じた形も併せて示す。

(5)いかに張替の御弓・御替矢だとして、いつまでもひつかついで居べいとも思ふな。(雑兵物語・上)

・いかに命がをしきとて、其身になりては何かせんなし。(浮・武道伝来記・六・一)

・なんぼうお聞なんすとて、はしたないおはなしを。しいしたなら。さぞさげしみなんです。ありいしやうが。(酒・契情買虎之巻)

・お吉は何程さげけたりとて流石女の胸小さく、(幸田露伴・五重塔・二十三)

・「……なんぼ越後の国だつて冬、蛇が居やしますまい」(夏目漱石・吾輩は猫である・六)

(6)心のすみあなむ後には、いかならん友にまじはるとても、なじかみだるべき。(京大近衛本撰集抄・三)

・さればこそ、いかなる物を売とても、直をいつはりてたかくいふを、買人はさま／＼ねぎらひて、まげさせ侍べるを、(嘶・

狂歌咄(四)

・いかに大幣の身なりとても、会ひました時分の情も棄て難く、恩をも受けました義理でも会ふ筈の事でござんす。(仮・難波鉦・五)

・町人などの様なるものは、いかほど持丸長者といはるゝとても、心得なきもの也。(随・ひとりね・上)

・いかに地代店賃、取立がよいとても、店衆に不埒な者を置ては、地主の難義。(談・当世下手談義・二)

しかし、例(6)に挙げた撰集抄の例のように、比較的古い例に共起する不定詞には、連体的なそれも多いが、近代語においては、その他の逆接仮定的な形式の場合も含めて、一般に連用的なそれとの共起がめだつ。これは不定詞との共起による仮定性の明示化が、近代語において一つの形式と化してきたことを示すものであろう。

また、次のように実現可能性の低さを示せる副詞との共起によつて、その仮定性を明示化することも時代が下るにつれて多くなるように思う。

(7)この難はいはれぬ事なり。たとひ新しく出来りとも、必しもわろかるべからず。(無名抄)

・たとひ御恨みは無きとても、面白紛れに迎へさしやんす我が身の事なれば、秋風がたつまい物ならず。(仮・難波鉦・一六)

・たとへ御見は任せぬとても、ありし馴染のく、末は互ひの逢瀬川、さてよい中(松の葉・三・さかづき)

・もしも道にて追手のかより、割れ／＼になるとても、浮名は捨てじと心がけ、剃刀用意いたせしが。(浄・曾根崎心中・下)

・たとへいかれるとても、やみほうけたそのさまで。人のみるめ

もあるものだ、よしやれ〜。(酒・契情買虎之巻)

次の「といって」「といっても」「といったって」などの形も、この「とても」形式の意味をより分析的に表現する形式と言えよう。

(8)我らが一門は、いかにはげしい冬というても、飢渴に責めらるる苦しみもなし。(ニッポ・四五八頁)

・いかに其日あふ客に廻り分じやといふても、おれも薬で作りても男のうちじや。ことにまだ其日の客はこぬと聞いたに、そこからそこへ会ひにおじやる事がならぬといふ事がある物か。

(仮・難波鉦・五)

・なんぼ下〜と申しても、そふもいわれませぬ(伎・女士佐日記・上口明)

・ナニ十五だといつて十六だといつて、油断がなるものか。(人・春告鳥・初・四)

・この馬は、なんぼ目隠しをさせね〜といつても、道草ばかり食つて、さつぱりあるかねへのウ。(仮名垣魯文・西洋道中膝栗毛・九下)

・シカシ彼娘が幾程美しいと云つたつて、何処かの人にやア……兎ても……(二葉亭四迷・浮雲・二・七)

二 「ばとて」「たとて」とその周辺

中世ごろからは、また次のように順接確定条件を示す「已然形+ば」と「とて」とが熟して、「ばとて」となった形も現れた。これを「ばとて」形式と呼ぼう。

(9)此者一人うつたればとて、軍の勝負有まじ。(金比羅本保元・中)

・めさんにまいらねばとて、命をうしなはるゝまではよもあらし。(寛一本平家・一・祇王)

・のすから世を貪るに似たる事も、たよりにふれば、などかなからん。さればとて、背ける甲斐なし。さばかりならば、なじかは捨てしなどいはんは、無下の事なり。(徒然草・五十八)

・暮れなばなげの花のかげかは「なけんや、暮れたればとて、なかるべき花か」といひたる心也。(正徹物語・上)

・秦楚ヲ合スレバトテ韓ニアタラウ用デナイト公仲修ニ云ヘト云ゾ(史記抄・樽里子甘茂伝・一一三ウ)

・いはんや蝙蝠づれの臆病者どもが、五万十万敵に付いたればとて、戰場へ出でては一羽もえ追ふまいぞ。(エソポ・四六一頁)

「ばとて」形式と同じ「已然形+ばとて」という形の連語には、次のように順接的な用例も拾えるが、その出現も時期的に逆接仮定的な「ばとて」形式の登場と重なるように見える。逆接的仮定的な形式の一般化と、相互につながっていると見るべきであろう。

(10)勘当のをもければとて、あはせたまはざりしこそ、よの過差はたひらぎたりしか。(大鏡・時平伝)

・九条殿ノ例ナレバトテ、イソギアケテ左大将ニナサレヌ。(愚管抄・六)

・かへの太刀はなけれ共、御辺のこうところがやさしければとて、さきをうたせける郎等の太刀を取、金子にとらす。(金比羅本平治・中)

・彼一行阿闍梨は大犯の人なればとて、暗穴道へぞつかはしける。(寛一本平家・二・一行阿闍梨之沙汰)

・先降人の法なればとて、物具太刀刀を奪取り、高手小手に禁て、

六波羅へぞ渡しける。(元和整版本太平記・六・6)

・一夜こねばとて、とがもなき枕を、たてなまげに、よこなまげに、なよな枕よ、なよまくら。(閑吟集・一七八)

「ばとて」形式は、「とて」形式の「終止形」に当たたる部分が「已然形十ば」という順接確定条件を明示する形に分析されているだけ、「とて」形式よりも、事柄の既定性——現実性と、因果論的な対立関係の明示性とを高めている点がある。「ばとて」形式は、「とて」形式をそういう方向に肥大化させたものと見る事ができる。

次にそういう点のうかがえる「ばとて」形式の例をさらに追加し示す。

山院宣につゐてまいる親治が宣旨なればとて、今更ひるがへすべきやは。(金比羅本保元・上)

・心のはやるまゝになまじひなる事はいひちらしつ、伴者ともなひものは一人もなし、さればとて、又とつてかへすべきにもあらず。(同・中)

・未代ナレバトテ、感応ムナシキ事ハアルベカラズ。(梵舞本沙石集・二)

・御心のへだてであるべからず。かゝればとて、我、露もかはる心なし。(とはずがたり・三)

・仰なればとて、大納言左右なう失ふ事有べからず。(寛一本平家・二・小教訓)

・所詮、口軽くしなして心地を沈むべからず。かく言へばとて、一向に付かぬ句をせよとはあらず。(連理秘抄)

・敵大勢なればとて、戦はで逃る様やある。(元和整版本太平記・三・2)

「ばとて」形式による表現も、次のように不定詞との共起によって、その仮定性を明示化することができた。室町期以降には、特に連用的な不定詞「いかに」などの共起が目立っている。

山イカニ我身ヲ没スレバトテ非義ヲバセウズ事デモナイゾ(史記抄・周年紀・二59ウ)

・イカナ下部ナレバトテ用ニモナイニ氣ヲ損サセテハ無用ノ事ゾ(史記抄・汲鄭伝・一四68オ)

・いかに都の者が云はとて、それをもとめて来るといふ事が有物か。あちへうしよ。(虎寛本狂言・未広がり)

・何程風の強ければとて頼みきつたる上人様までが、此十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも破壊るゝ敷のやうに思し召されたか口惜しい(幸田露伴・五重塔・三十四)

「ばとて」形式における現実性の明示化傾向と、不定詞「いかに」などとの共起による仮定性の明示化とは、その対立的な方向性のもとに、より重層的な表現性を導きもしたが、その点については、別稿を予定している。

また、「ばとて」形式も、次のように実現可能性の低さを示す副詞との共起によって、その仮定性を明示化することもできた。

山たとへ千貫すればとて、伊勢多びなしに蓬菜を餅りがたしと、家くくに調ければ、(浮・世間胸算用・一・三)

・よし多少文三に心を動かした如き形迹が有ばとて、それは真に心を動かしてゐたのではなく、只ほんの一時感染れてゐたので有つたらう。(二葉亭四迷・浮雲・三・三十六)

・よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴あいつに出来る仕事でもなく、(幸田露伴・五重塔・一)

「ばとて」形式に似て、「已然形十ば」と「とても」が熟した、「ばとても」の形も次のように中世に例が得られたが、「ばとて」形式のそれ比べて、その例ははるかに限られているようである。

④げに又判官殿にておはしませばとても、忝くも鎌倉殿の御弟にてましませば恐れあり。(義経記・七)

先述の「とて」形式には、順接仮定の「たらば」形式の後を追うかのように、完了を表す助動詞「た」を「とて」で承けた「たとて」の形も近代語には多くなる。それを「たとて」形式と呼ぶことにする。その「たとて」は、転じて「たつて」の形になることも多い。「たつて」は、形容詞には連用形にも終止形にも付くようになつた。次に「たとて」「たつて」の例(「たとても」の例も含める)を併せて示す。

⑤今時浪人して山林へ引込で、迎ひが来たら行てつかへ様と云て、果報を寐て待て居たとて、誰が呼出してつかふ物だ。(談・当世穴さがし・五)

・あれが行たとても。紅葉がおもしろくも。なんともないわざ。(酒・遊子方言)

・覚えはないといつたつて、胴巻の出たのは何うしたのだ。(三遊亭円朝・牡丹燈籠・十一)

・おめへ、そんなに急イだつて、大勢おほ勢の病人へ切手が渡つてゐるのだから、直すにといふわけにやアいかねへヨ。(仮名垣魯文・西洋道中膝栗毛・十上)

・誰が彼様な奴つに……乞食したつて彼様な奴のお嫁に成るもんか。(二葉亭四迷・浮雲・二・十二)

・蒲鉾の一切位頂戴したつて人から彼かれ云はれる事もなからう。

(夏目漱石・吾輩は猫である・二)

「たとて」形式にも、次のように不定詞と共に起した例が少なくない。

⑥そりやアおまはんだれがきたつて、しよふと思ふ返事ならしまではアな。(人・春色梅児誉美・初・五)

・篋くわ棒め、うちなんかいくら大きくたつて、腹の足しになるもんか。(夏目漱石・吾輩は猫である・一)

・もう解つたよ。何遍繰返したつて同じ事だ。(志賀直哉・暗夜行路・一・一)

・いくらいそがしいたつて、お前、弓ぐらゐひかずひかずにゐられるかい。(島崎藤村・夜明け前・一・六・一)

・先生自身も幾ら頼まれたつて注射を引受ける意志はない。(井伏鱒二・本日休診)

次の「たとて」「たというても」などの形は、この「たとて」形式の意味をより分析的に表現する形式と言えよう。

⑦あれがよせてきたといふて、何ほどの事がありやろうぞ(虎明本狂言・若市)

・去ながら又よそへいたといふても、べちなる事も有まひ程に、いつもの事なれ共、堪忍さしめ(虎明本狂言・石神)

・どうしたといつていいいやアねへか。此様な活業しやうばいをさせながらきてうめんなことが出来るものかな、やかましい。(人・春色辰巳園・初・五)

三 「ても」「で」「も」の標準化

しかし、近世から現代にかけての逆接仮定的な表現には、「とて

も」形式などより、さらに文脈依存度の高い形式が次第に標準化していった。連用形を承ける「ても」形式がそれである。「ても」形式も、古代語からあって、次の例④のように逆接仮定の「とも」に相当する関係だけでなく、例⑤のように逆接確定の「ど／ども」に相当する関係にも用いられていた。

④わが身はいみじいきほひになりても、わが君をさるいみじき者の中にはふらかし奉りては、何心地かせまし。(源氏・たまかつら)

⑤ちかひても猶思ふにはまけにけりたがため惜しき命ならねば(後撰・恋四)

中世以降の「ても」形式も、逆接の假定・確定の両者に用いられる点で、古代語のそれを継承してはいるが、近代語ではこの「ても」形式が特に強調を要しない場合の逆接仮定的な条件形式として次第に標準化し、やがて強調を要する場合でも、「ても」形式を不定詞や実現可能性の低さを示す副詞と共起させることが多くなってきたようである。

まず、「ても」形式だけの例の一斑を次に示す。

④これほどにうしろめたる思はれ奉つては、世にあつても(源・目)何に致さうぞ?(天草版平家・三九頁)

・腹のみ脹れても足立たずしてはその甲斐無し。(仮・浮世物語・二・四)

・五兩十兩は用に立てても助けたし。(浄・心中天の網島・上)
・勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中の章魚同然手も足も出せないのだから、(夏目漱石・吾輩は猫である・十一)

次の例④のように不定詞と共起したり、例⑤のように実現可能性

の低さを示す副詞と共起したりすることも次第に多くなっていく。

④いく万代をかさねても、名残つくべきにあらず。(曾我・六)

・いかほどかせいでも、まんぞくなど思へばようござれども、少しもそれをそれ共ぞんぜぬによつて、はらがたつ。(虎明本狂言・石神)

・又かたへ夷人が我庵を尋来らん、いか程道にまよひても、我等が庵ある上は何れたづねあふなり。(斬・一休はなし・四)
・なんぼどういはいしやんしても、縁づくの事は親のまゝにもならぬものじや(伎・心中鬼門角・上)

・おまへがどんなに力身なすつても、江戸は繁花の地だ。(滑・浮世床・初・中)

・いくら女が口先でかへれといつても、どふして〜。(伎・与話情浮名横櫛・序幕)

・いくら功德になつても訓戒になつても、きたない者は矢つ張りきたないものだから、(夏目漱石・吾輩は猫である・九)

・「幾ら惜しくても、もう追ひつかない」(志賀直哉・暗夜行路・十三)

④あの人は、ふたりながら見しられた程に、しぜん見えあふてもくるしうあるまひ(虎明本狂言・連歌盗人)

・今より後、御計らいに任せて、たとい飢えても、再びそう致すまいと思ひ定めあれ。(コリヤード懺悔録)

・身をほろぼし家をうしなへば、たとへ今、雪中に筍掘出してたもつても、不孝の罪はのがれぬ。(談・当世下手談義・二)

・よしやたとへ惣菜のあらめに百が梅漬を食つて、五町まち中へ黒飛の糞をたれても、張り合ふ事がなるものかへ。(酒・傾城

買二筋道)

・よしやおめへはそうしても、させてはすまぬ浮世のならひ(人

・春色辰巳園・初・三)

ちなみに、近世には次のような「てから」の形も、逆接仮定的な表現をつくるのに用いられた。前句を承ける形態が「て」だという点で、これも「ても」に近いものである。

例)たとへいひわけ立てから、ぬす人の名を取り、見ぐるしいめにあふては。とつ様にかははむけられぬ。(浄・丹波与作待夜の
小室節・中)

「ても」形式の標準化に伴い、名詞句や形容動詞句を前句とする場合には、指定辞「だ」の連用形「で」や形容動詞の連用形活用語尾「で」に「も」を付けた形を逆接仮定的に用いることも併せて標準化していった。その形を便宜「(で)も」形式と呼ぼう。「で」をカッコに入れるのは、その「で」に前句の句末語と見うる面と、より素朴な分析意識において「でも」のまとまりを接続助詞と見たくなる面とがあると考えからである。「で」は「にて」から来たものとして、語源的に「て」を含んでいるが、そのこともあるいは後者の意識に関係するだろうか。

例)あのごとくに乱れては主親の勘当も。釈迦達磨の意見でも、聖徳太子が直に教化なされても、いッかなく直らぬ(浄・冥途の飛脚・中)

次の例例のように不定詞と共起したり、例例のように実現可能性の低さを示す副詞と共起することも次第に多くなる。

例)なんほうおいやでも。今さらいやといふなんすと。うき橋さん
もたちいすまへし(酒・契情買虎之巻)

・イ、ヤなんぼ桜川善孝の息子でも、女ぎれへといふ請人はある
めへ、(人・春色梅児着美・三・一五)

・なんぼ船のりでも、見くびつたものじやアねへ(伎・与話情浮
名横櫛・序幕)

・いくら丈夫でもかう焼かれたり煮られたりしてはたまらん。

(夏目漱石・吾輩は猫である・七)

例)よしんば、われわれ老碌医者でも、場違ひのことは嫌やだ。

(井伏鱒二・本日休診)

四 その他の諸形式

以上のほかにも、なおいくつか逆接仮定的な表現をつくる諸形式が、近代語にはめだってくる。

広義の接続形式としては、命令形による逆接仮定条件の示し方が古代語からあった。いわば命令形仮定法であるが、標準的な接続形式が次第に文脈依存的なものに移行していく傾向の中で、その命令形仮定法は、相対的により明示的な形式として、その用途を広げていった感がある。次に室町期以降の例を少し挙げてみよう。近世以前の命令形仮定法には、助詞「も」が共起するのが一般的であった。例)如何なる神にてもをせよ、寂阿が戦場へ向はんずる道にて、
乗打を尤め可給様やある。(元和整版本太平記・十一・五)

・誰デモアレ余人ノ沛ノ主ニナラウト云モノガナイゾ(史記抄・
高祖本紀・六24ウ)

・守道者ハ、天道ハクミシモセヨ、クミセイデモアレ、各々吾ガ

志ニ從テ守道マデヨ(史記抄・老子伯夷伝・一〇9ウ)

・たとひ。くさかり笛にてもあれかし。又木こり笛にてもあれか

し。などてうし一手ふき申さぬぞ。(幸若・烏帽子折)

友達中間の付合ひで。引かれぬことが有にもせぬ。わたしが親の未進米、此六日の吉書に立ねば元の水籠。(浄・丹波与作待夜の小室節・中)

たとへせうこがなひにもせよ、モウ此うへはこつちから、事を亂すは千太郎。(伎・与話情浮名横櫛・序幕)

・ 仮令其等は美説にもしろ、人の痛いのなら百年も我慢すると云ふ昇が、自分の利益を賭物にして他人の爲めに周旋しようと思ふ、まづ其れからが呑込めぬ。(二葉亭四迷・浮雲・二・九)

・ たとえ冗談にもせよ、私たちも、いつとはなしに、この大電鉄という言葉をつかった。(椎名麟三・美しい女・二・一)

次のように「も」の共起しない例が出てくるのは、明治以降であるろうか。

● 屬吏ならば、仮令たとひ課長の言付を条理と思つたにしろ思はぬにしろ、ハイ／＼言つて其通り処弁して行きやア、職分は尽きてるぢやアないか。(二葉亭四迷・浮雲・一・一)

・ いくら旅空とはいへ迂闊なことは出来なかつたので御座いませう。(井伏鱒二・お島の存念書)

次のように「……にも」の形で逆接仮定的な意味を担う言い方は、例例に頻出する「せよ」や「しろ」の省略表現であろう。ただし、その省略が可能なのは、嘘・冗談・お世辞・義理などによる、本心によらない発言を仮定する場合に限られているように思う。

② たとへうそにも わたしがやうなものを。そのようにいつてくれなすは。どふやら嬉しいようでもあれど。(酒・契情買虎之巻)

・ 今じやア斯して居るから楽だらうと思つて、戯談じやうだんにもこのごろは工面がよかるう何ぞといふから、此間まはだも帯をト筋こせへてやつたら、どんなにうれしがつたらう。(人・春色辰巳園・初五)

・ そうだ、義理にも賞められやせんもう、と(小川国夫・悠蔵が残したこと)

先述の「ばとて」形式に含まれていた「已然形＋ば」は、近世口語において仮定を意味するものに転じていく。そのため、「ばとて」形式は口語的表現からは離れていったであろう。しかし、意味上それに代わるより新しい熟合形式が現れている。次のような言い方がそれである。

③ しかし落胆したからと言つて心変りをするやうな其様な浮薄な婦人ぢやアなし、(二葉亭四迷・浮雲・一・四)

・ 高がこれ股引が無えからとつて、仰山に咎立をするにやあ当らねえ。(泉鏡花・夜行巡査・一)

・ 姻家の阿母あははさんに宛まれたからとて何の可こ恐おそいことは無いが、(尾崎紅葉・多情多恨・前・十二の二)

・ それや、夢で、金持になつたからとつて、何も、ほんとに、金持になると限つちやるないさ。(岸田国土・ぶらんこ)

また、先述の「ても」形式を「とする」「ににする」などで肥大化させた、「としても」「にしても」などの連語も、仮定性の明示的な形式として用いられることが多くなっている。名詞句や形容動詞句を前句とする場合には、名詞や形容動詞語幹に「にしたも」を付けて用いられる。次にその一斑を示す。

④ 何ほど利発才覚りはつさいかくにしても、若き人には三五の十八、ばらりと違

ふ事数くなり。(浮・世間胸算用・一・三)

・飯令へ免職、窮愁、恥辱などといふ外部の激因が無いにしても、お勢の文三に対する感情は早晩一変せずにはゐなかつたらう。

(二葉亭四迷・浮雲・三・十六)

・万一寒月君が迷亭杯の説法に動かされて、此千古の良縁が破れるとしても、此陰士が健在であるうちは大丈夫である。(夏目漱石・吾輩は猫である・五)

・又よしんばさうでないにしても、かやうな場合に立ち至つて見れば、その汚名も受けずには居られますまい。(芥川龍之介・或日の大石内蔵助)

・しかし飯に弁償金を払つたとして、その想定的の結果については、およそ三つの派に一同の議論が分れて行つた。(井伏鱒二・当村大字霞ヶ森)

次のように「ところが」や「ところで」も逆接仮定的な表現法の一つとして用いられることがある。

(32)よし又鹽冶の浪人でござりました所が、何か御屋敷え引立て、がうもん被成まする、御上から御ふれでもござりましたかナ。

(伎・東海道四谷怪談・序幕)

・安達ヶ原の鬼のすみかか武蔵野の石の枕でない処が博奕宿と淫売宿と兼ねた処位ではあらうと想像せられた(正岡子規・仰臥漫録・九月十九日)

(33)仮りに一步を譲つて、全く朋友の信実心から彼様な事を言出したとした所で、それなら其れで言様が有る。(二葉亭四迷・浮雲・九)

・あなたが幾ら心配した所で、直接病氣の爲めには何も出来ない

んだからね。(志賀直哉・暗夜行路・三・十八)

「う」などの推量辞が逆接的な接続助詞と共起する形も、近代語にめだつてくるものである。古代語以来の逆接仮定の接続助詞「とも」は次第に衰退して、たとえば「母親の手足にはならずとも」

(二葉亭四迷・浮雲・一・二)のように、「ず」や形容詞を承ける限られた用法に残る程度になるが、推量辞と共起する「……うとも」などの形では、なお「とも」の形で用いられている。ただし、「う」と共起する場合は、その「も」を落とした「……うと」の形で用いられるほうが一般的になっていく。一斑を示せば、推量辞とその「と」や「とも」の共起例には、次のようなものがある。

(34)ニトメサレウトモ陛下ノ御意ニ在ルゾ(史記抄・袁盎黜錯伝
・一二三7ウ)

・今こそかやうにこり酒をしやうばい致す共、一のたなさへとつておいたらば、後にはなにをあきなひにいたさうとまゝで御さる。(虎明本狂言・連尺)

・月であらふと、すいであらふとも、大物日をするを手柄にします。(仮・難波鉦・一)

・なあと、あなたが何をなさらうと仰つしやらうと、夫に構つてるんぢやないんです。(夏目漱石・吾輩は猫である・三)

・私は知つてゐた。心がどんなに目ざめてゐよう、と、胃や腸や、これら鈍感な臓器は、勝手になまぬるい日常性を夢みだすことを。(三島由紀夫・金閣寺・十)

推量辞と共起して逆接仮定的な表現をつくる接続助詞としては、次のように「が」もよく用いられている。

(35)祝言有ふが有まいが。言号有るからは天下晴ての力彌が女房。

(浄・仮名手本忠臣蔵・九)

・其上に髪結といふものは場所をしやうが、床を預らうが、人の機嫌氣づまを取らねへきやアなりません。(滑・浮世床・二・下)

・たとへ西洋の風だらうが、此方は日本の風で、床にも入れねへ女の揚代を、はらう法がねへ。(仮名垣魯文・西洋道中膝栗毛

・三上)

・たとへ、かさけがあらうが、なからうが、女にうけられるのは、おめへより上は手だヨ。(同・十上)

古代語から現代語へと時間の流れにそつて、逆接仮定表現の推移をたどつてきたが、最後に、その要点を現代語から振り返るかたちでまとめておこう。逆接仮定の接続形式は、その逆接性についても、仮定性についても、より文脈依存的な形式へと、次第に推移してきた。しかし、必要があれば、その事柄の現実性や因果論的な条件性の明示化に、「ばとて」形式を用いるとか、その仮定性の明示化には、連用的な不定詞や、実現可能性の低さを示す副詞、あるいは、推量辞などの共起を計るというように、多様化してきた点もある。そういう多様化に支えられながら、標準的には少しでも文脈依存度の高い形式を中心とすることで、全体に表現の効率化が進んできたと言えよう。

注

(一) 此島正年『国語助詞の研究——助詞史の素描——』(昭和四一年、桜楓社)の、本論第二章第三節第二項『』とも『』でも『』とて『』たつて『』た、より限定された視点からの、より素描的な試みがある。

(2) 拙著『古代接続法の研究』(昭和五五年、明治書院)第五章。
(3) 拙著『古代接続法の研究』第七章。

——本学教授——